

① 事業実施報告書詳細

学校名 柏崎市立半田小学校

時間数	場所	概要	活動記録(写真)	対象者の反応
10時間	源太川	<ul style="list-style-type: none"> 源太川のイメージを出し合う(思考ツールの三角チャートを使用)。 源太川での生き物調査や水質調査を行う(理科の学習を含む)。 	 	<ul style="list-style-type: none"> 源太川はきたない、遊べないといったマイナスイメージをもつ子供が多かった。 実際に川に入ることによって、源太川は川の生き物が多く水質も良好だと分かった。
5時間	源太川 上流 中流 下流	<ul style="list-style-type: none"> 源太川がどんな川かを知る(川の歴史や役割、流れの変化を上流から下流まで追う)。 	 	<ul style="list-style-type: none"> 源太川は、排水路の役割がある事を知り、驚いた様子であった。 源太川ができるまでに、洪水やそれに伴う米不足など多くの困難を乗り越えてきたことを知り、大切にされてきた川だと気付いた。
50時間	学校の教室	<ul style="list-style-type: none"> 源太川のためにできることを話し合い、行動する(国語科・社会科を含む)。 		<ul style="list-style-type: none"> 看板は維持管理に時間や労力がかかるため、エコバッグにして源太川の役割を多くの人に伝えようと考え行動していた。
5時間	学校の教室	<ul style="list-style-type: none"> 源太川報告レポートを書く。 		<ul style="list-style-type: none"> 自分にとって源太川とはどんな存在かを考える。

②学習指導案

単元名 (全15時間)	源太川活動報告レポートを作ろう
学習のねらい	源太川での活動を振り返り、報告レポートを書くことで、「自分にとって源太川とはどのような存在なのか」「どうしていききたいか」を考え、川への愛着を深めることができるようにする。
学習内容	1 源太川での活動を振り返る（作文シートを読み返し、まとめる） 2 報告レポートを書く 3 報告レポートを見合う 4 報告レポートを発表する
参考資料 準備品 実施場所等	・今まで書きためてきた作文シート ・教室

学習の流れ

時間	学習活動	教師の指導	評価
5分	○作文シートを読み返す。	・今までの活動の写真も見せ、活動がどのように進んできたかを振り返ることができるようにする。	
20分	○報告レポートを書く。 ・報告レポートの最後のページを書く。	・「自分にとって源太川とは・・・の存在」と、書き出しを提示することで子供たちが書きやすく、川への思いを膨らませやすいようにする。	自分の言葉で書くことができている【報告レポート】
10分	○報告レポートを見合う。 ・机上に報告レポートを置き、移動しながら読み合う。	・自分とは違う視点で書いている子など、友達のレポートを読むことで新しい視点を取り入れることができるようにする。	友達のレポートを見て、いい所を見つけ、自分のレポートにいかそうとしている【発言】
5分	○報告レポートを推敲する。 ・友達の報告書を読んで、書き直したい所や自分の文で深めたい所を修正する。	・自分の報告書を深めることができるように、同じ観点でも理由が違う子や、観点が違う子などに分けて取り上げる。	内容を説明しながら、分かりやすく伝えることができている
5分	○報告書を発表する。 ・お世話になった方に、冊子にした報告書を渡し、発表する。	・伝えたい場所を焦点化させる。	【報告書】

<留意点>

- ・何のための報告書なのか、目的意識をもって取り組むことができるようにする。
- ・国語科との関連を図る。報告レポートの書き方を指導した後で実施する。

③ 実施内容について

<p>(1) 実施にあたり工夫した点</p> <p>「比較」の場面を取り入れ、客観的に源太川を見つめることで、「自分たちの川は・・・だ」という源太川への理解や愛着を深めることができるよう、指導を工夫した。</p> <p>また、多くの場面で話合いや地域の方と触れ合う場面を設定し、地域の方の源太川への願いや自分たちの願いを多くの視点から考えることができるようにした。</p>
<p>(2) 実施にあたり苦労した点</p> <p>活動を子供の願いどおりに進めるには、お金がかかる場合が多く、そのお金の出所を子供や保護者に説明することに時間や労力が必要だったこと。</p>
<p>(3) 児童の反応</p> <p>源太川上流でのカヌーや下流での溪流ウォークを、本助成金で実践できた。その結果、生活に根差した川での活動を一人一人の子供たちが身をもって実感することができ、源太川への愛着や理解がより一層深まっていた。学習の最後に行った「自分にとって源太川とは・・・」という報告書の「教科書のような川：多くのことを教えてくれたから」「母のような川：多くの生き物や私たちの生活を生み出し、支えているから」という子供の声からも学習の深まりがよく分かる。</p>
<p>(4) 担当教諭及び担当外教諭の変化</p> <p>川は危険な面と楽しい面、生活に役立つ面と生活を壊す面など、子供と同じ目線で多くの視点から川を捉えることができたのは、活動を子供たちと一緒に体験しながら進めることができたからだと改めて思った。溪流ウォークやカヌー体験は、危険な面をもつことから担当外教諭の理解を得ることが難しかった。しかし担当外の教職員も、体験後の子供の充実した顔や子供の活動報告書を見ることにより、危険なことでも子供は丸ごと受け止め、乗り越える力があるのだと気付いた様子であり、応援してくれるようになった。</p>
<p>(5) 今後の課題と取組（児童の思考過程と指導内容との関連付けから、留意すべき事項等）</p> <p>川について知った上で、自分にできることを考えた。最初は実現が不可能に思えることを言っていた子供たちも、川について知ることで実現可能なことを考え始めるようになった。多くの人に源太川の役割や源太川でできる活動を知ってほしいと願い、看板を立てることにした。しかし、「看板を立てるには管理期間が10年必要だ」と知った子供たちは看板を維持管理することは自分たちにはできないことだと気づき、エコバッグにして多くの人に配ったり、リーフレットにして町に貼りだしたりした。国語科（リーフレット作り）や社会科（環境教育）での関連を図り、子供たちの思考がスムーズになるようにしたが、各教科での取組をもう少し早くし、活動に転用することで、「自分たちにできること」の活動がより身近で取り組みやすくなり、早期に内容を深めることができたのではないかと考える。</p>